

LA NOUVELLE

No.36
PRINTEMPS

東京外語仏友会

〒113-0033 東京都文京区本郷 2-14-10

本郷サテライト 東京外語会気付

発行責任者 川口裕司 (1981/昭56)

2026.4.1 発行

2025 年 サロン仏友会

中村日出男 (1974/昭49)

11月16日(日)、第30回サロン仏友会が四ツ谷の主婦会館プラザエフで開催されました。今回もオンライン配信はなく、対面形式のみでの実施となりました。会場参加者は35名で、前年より3名増えました。

はじめに、中村日出男副会長(1974)の司会で、本学名誉教授の川口裕司仏友会会長(1981)より開会の挨拶と母校の近況報告がありました。続いて、外語大非常勤講師の中村恵さん(1983)が登壇し、「緒方貞子第8代国連難民高等弁務官との出会いに導かれて」の演題で講演されました。緒方さんの旧姓は中村で、この日はちょっとした「中村デー」になりました。

中村講師は、NPO法人国連UNHCR協会に在職中、約3年近くにわたって緒方貞子さんの私設秘書を兼務されたご縁で、ご著書『難民に希望の光を 真の国際人緒方貞子の生き方』を刊行されています。印税全額をUNHCRへ寄付されているとのことでした。間近で緒方貞子さんの働く姿を見てこられただけに、説得力のある言葉でその生きざまを紹介してくださいました。

約20分の活発なQ&Aタイムの後、休憩時間に参加者の集合写真を撮りました。懇親会の部では、和賀千恵子副会長(1970)の司会のもと、外語会理事長の寺田朗子さん(1975)に乾杯の音頭をお願いしました。参加された皆様には、フィンガーフードの軽食と南仏のワインでご歓談いただきました。会場内は、あちこちで談論風発の輪ができ、仏友会伝統の和気あいあいとした光景が見られました。

この伝統を、今後も大切にしていきたいと思います。



参加者の集合写真

水林章氏講演会 & 懇親会 『フランス語とともに歩んで』

中村日出男（1974/昭 49）

元 TUFS 教授で上智大学名誉教授の水林章氏（1976）が、昨年アカデミー・フランセーズのフランス語圏グランプリを受賞されたことを記念して、仏友会では、同氏の特別講演会 & 懇親会を 3 月 15 日（日）に四ツ谷の主婦会館プラザエフで開催しました。共催者として、日仏経済交流会パリクラブも加わり、会場は 64 人の参加者が集まる盛況ぶりでした。

アカデミー・フランセーズは 1635 年に宰相リシュリューが設立。フランス学士院を構成する 5 つのアカデミーのうちの最古のもので、国家語としての近代フランス語の確立・普及を目的として誕生しました。現代フランス文化における「言葉」の最高規範を作っている大本で、『アカデミー・フランス語辞典』の編纂・改訂と文学賞の授与が主な活動となっています。水林氏は、これまでフランス語で 9 冊のエッセーと小説を発表されていますが、今回のフランス語圏グランプリは、氏の長年にわたるフランス語文化への貢献が高く評価されたものです。

演題は『フランス語とともに歩んで』。高校 2 年の秋、森有正を読んで感銘を受けたことから始まって、人生の転機となったフランス人小説家及びガリマール出版のエディターとの出会い、そこから生まれた”Une langue venue d’ailleurs（他処から来た言語）”の成功から、最新作”La forêt de flammes et d’ombres（炎と影の森）”までの歩みを、多くの写真を交えて語ってくれました。

講演後の Q&A も活発に行われました。中でも印象的だったのは、水林氏がフランス語で話したり小説を書いたりする時は、片言も日本語の表現が脳裏に浮かぶことがなく、すべての思考・表現がフランス語だけで完結しているということでした。

続いて行われた懇親会では、会場内の随所に談論の輪ができ、フランスワインと軽食を手に講演の感想を語り合っていました。特に水林講師のもとには、一言でも話したい参加者が次から次へと列をなし、氏の人気ぶりを物語っていました。水林氏は、日本とフランスで一年の半分ずつを過ごす生活で、フランス国内では、パリやボルドーのような大都市から人口 400 人の小さな村まで、津々浦々で書店でのお話会やサイン会に呼ばれています。今回、東京で記念講演会が開催できたことは、大変ラッキーなことと幹事一同喜んでいきます。

※なお、今回のご講演の要旨を、幹事の江森さんが別紙「水林章氏講演会 & 懇親会レポート(江森)」にまとめてくださいましたので、併せてお読みください。



講演中の水林章氏



水林章氏を囲む仏友会員一同

追悼 仏友会の星、藤原作弥さん

高田信二（1980/昭55）

時事通信社の解説委員長を務め、記者としては異例の日銀副総裁に抜擢された仏友会同窓の藤原作弥さんが昨年 2025 年 10 月 17 日に、病気のため横浜市の自宅で逝去されました。行年 88 歳。

藤原さんは 1937 年、仙台市生まれ。井上ひさしらを輩出した名門仙台一高を経て、1962 年、東京外国語大学フランス語科卒。同年、時事通信社に入社し、経済部記者と

して活躍しました。私（筆者）は、1980年に同じく仏語科を卒業して時事通信社に入社し、藤原さんと全く同じ道を辿ったという理由で、追悼文を執筆するよう仏友会幹事の中村日出男氏から依頼がありました。

藤原さんと私とでは学年では約20年の開きがあります。しかも、戦中派と戦後生まれという世代的に大きな開きがあります。もう一つ、マスコミ業界の記者職には政治部、経済部、社会部…などと分かれています。その「部」が違えば、同じ会社でも全く別の会社のように、顔を知らなければ名前も知らないというのがほとんどです。藤原さんは経済部畑、一方の私は主に運動部と文化部の記者でしたので、本来なら接点がないはずでした。とはいえ、思い起こせば、文化部記者時代に藤原さんには仕事でお世話になったので、私の知る藤原さんの隠れた横顔を中心に話を進めて行きたいと思います。

藤原さんは1982年、「聖母病院の友人たち」（新潮社）で日本エッセイスト・クラブ賞を受賞し、社内外で有名人になりました。時事通信では珍しいスター記者です。私も入社した頃から、お名前だけは聞いたことがありましたが、若輩でしたから、藤原さんは、とても手の届かない「雲の上の殿上人」でした。

藤原さんと接点が出来たのは、1992年頃、私が文化部の文芸担当となり、藤原さんに書評委員をお願いしてからでした。毎週、月曜日の書評委員会でお会いすると、私が東京外語大、しかも仏語科の後輩であるせいか、かなり親しくさせていただきました。藤原さんは、苦労人のせいか、20歳近く年が離れた後輩である私に対して、最初から「高田君」ではなく、「高田さん」と丁寧な言葉遣いで、物腰も柔らかく、非常に紳士的でした。

そのうち、藤原さんは「高田さん、僕は本当は経済部じゃなくて、文化部に行きたかったんですよ」とか「嗚呼、もっとフランス語を勉強しておけば良かった」などと本音を話してくださるようになりました。その通り、藤原さんの卒論は「第一次大戦前後、激動の新興芸術時代に若きレイモン・ラディゲは、なぜ古典的静謐を保ち得たのか」でした。戦後間もなく、満洲（現中国東北部）で約2年間、難民生活を送って学業が疎かになり、数学嫌いな文学青年だったのです。数字を扱う経済は不得手なので、入社したての頃は、何度も会社を辞めようと思ったそうです（集英社刊「素顔の日銀副総裁日記」）。

そう言えば、初対面の時、当時、私も生意気にも口髭を生やしていたので、藤原さんは「エロール・フリンに似てますね」と、私の全く知らない往年の映画スターの名前を口にしたりしました。若い頃から映画や演劇好きで、人脈の広い藤原さんは自著の「李香蘭 私の半生」（新潮社）が、浅利慶太氏率いる劇団四季のミュージカル化に繋がって行くのです。

文化部時代にお世話になったもう一つの仕事は、お正月の紙面用の「新年企画」の「対談」として、解説委員長藤原さんに登場して頂いたことでした。私が担当した時は、お相手は日本文学者のドナルド・キーンさんでした。藤原さんは、おくびにも出さずでしたが、事前はかなりキーンさんの著作を読んで来たらしく、ほぼ「互角」に対談して頂きました。質問が上手で、キーンさんから「私は日記を付ける習慣がなかったの

で、せっかく三島由紀夫さんら文豪にお会いして色んな話を聞いたのに、詳しい内容は忘れてしまいました」などといった秘話を引き出していました。

さらに、もう一つ、私と藤原さんとの接点は「満洲」でした。私は、近現代史、特に昭和史に関心があり、「ゾルゲ研究会」など色々な勉強会に参加しているうちに、「合作社事件研究会」という会合で、農水省出身で満洲研究家の松岡将さん(1935~2024年)と知り合いました。松岡さんの父は松岡二十世(はとよ)と言って、ゾルゲ事件で刑死した尾崎秀実とは東京帝大と同大学院で同級生で、小林多喜二らとも交流がありました。

松岡さんは子ども時代に満洲で過ごし、ソ連軍の侵攻により父二十世氏はシベリアに流刑されて病死し、松岡さんも苦勞の末、かろうじて満洲から引き揚げてきた体験の持ち主です(松岡氏著、日本経済評論社刊「松岡二十世とその時代」)。その松岡さんは、東京都内の自宅で、満洲関係の「映写会」などを開いていました。その中に、藤原さんも参加していたのです。

藤原さんも、子ども時代に満洲で過ごし、命からがら引き揚げて来た体験の持ち主だったことは、著書「満洲、少国民の戦記」(新潮社)に詳しいですが、私は、藤原さんからも、満洲での生の体験談を聞くことになりました。

特に、悲痛な話は「葛根廟事件」です。これは、1945年8月、満蒙(現中国内モンゴル自治区)の興安街(現ウランホト市)郊外の葛根廟で、避難中の民間日本人1000人以上がソ連軍戦車隊によって大量虐殺された事件ですが、その中には藤原さんと在満国民学校の同級生ら200人以上も含まれていたのです。藤原さん一家は、幸運にもその直前に避難していたので、事件に遭遇しませんでした。犠牲者の一人になり得たのです。その後、藤原さん一家は、今の北朝鮮国境近い安東まで逃れ、そこで難民生活を送りますが、そこで「銃殺刑、市街戦、餓死病死、強盗窃盗、婦女暴行、飲酒喫煙」等を目の当たりにします。わずか9歳で人生を達観してしまったのです。ですから、長じての藤原さんを見ると、何処か心の奥底に暗闇を抱えていて、だからこそ、他の人にはわざと明るく振る舞ってみせるところがありました。藤原さんに仲人を頼んだ時事通信の同期で経済部記者だった泉正樹君に話を聞いたら「藤原さんは清濁合わせ飲むことが出来る人だった」と巧みに表現していました。

この機会に私は藤原さんの著作をほぼ読み直しましたが、文章がうまく読みやすいことを感じました。藤原さんの祖父相之助氏は仙台の「河北新報」の主筆を務め、民俗学者になった人、父勉氏は言語民俗学者で、日本語とモンゴル語の共通点などを研究するために満洲の興安軍官学校の教授になったほどです。文章の巧さは遺伝的要素が強かったのです。

東京外語大仏語科出身の文人として、大杉栄、中原中也、富永太郎、菱山修三、石川淳らがありますが、藤原作弥さんも後世、文学史に名を残すことでしょう。(本稿で書けなかったことは、拙ブログ「溪流齋日乗 <https://keiryusai.net/>」をご参照ください)



2015 年仏友会総会で講演された藤原作弥氏

パリ旅行の思い出

中村日出男 (1974/昭 49)

私は 2 回のフランス勤務で通算 10 年パリに滞在しましたが、家族も皆パリが大好きで、約 10 年前からコロナの時期を除いてほぼ毎年のようにパリ旅行をしています。昨年は、11 月の下旬に行ってきました。行くたびに、何らかのテーマを決めてスケジュールを組むのですが、今回のテーマは「縁日博物館」見学と、パリを舞台にした映画によく登場する場所に実際に行ってみることでした。

縁日博物館（移動遊園地博物館）は、パリ東部のベルシー地区にあります。フランス各地で使用された移動遊園地の古い乗り物やゲーム機、遊び道具が大量に陳列され、一部は実際に乗って楽しむことができます。1 つ目の写真は自転車を輪状につなげたメリーゴーラウンドで、私たちもペダルを漕いでしばし童心に還りました。『ミッドナイト・イン・パリ』を始めとする、パリを題材とした映画に出てくる遊園地のシーンは、ほとんどがこの縁日博物館で撮影されているそうです。この地区は、元はワイン商の倉庫街だったので、かつてワイン樽を運んだ貨車の線路跡が残っており、周辺の道の名前に

は全国の有名なワイン産地名が付けられています。最寄りのメトロの駅名は「クール・サンテミリオン（サンテミリオンの中庭）」でした。

『ミッドナイト・イン・パリ』関連では、酔って道に迷った主人公が真夜中に座っていたサンティエンヌ・デュ・モン教会の石の階段も撮影しました。また、その階段の前に現れるクラシックカーに乗り込むと、タイム・トラベルをしてひと昔、ふた昔前の時代に飛ぶ設定ですが、主人公が会えるはずもないヘミングウェイと会ったレストラン・ポリドール（2つ目の写真）には、実際に行き食事を楽しみました。ここは、一昨年も行きましたが、相変わらず満席の賑わいでした。ノートル・ダム近くのシェークスピア・アンド・カンパニー書店も『ミッドナイト・イン・パリ』に登場します。写真は割愛しますが、ここも入店の順番待ちの列ができる人気ぶりでした。

そのほか、『エミリー、パリへ行く』に出てくる、モンマルトルのエミリーのアパートや、『アメリ』に登場するクレーム・ブリュレで有名なカフェにも行きました。また、数多くの映画のロケ地になっているポン・ヌフや、アレクサンドル三世橋のあたりも散策しました。どこを歩いても絵になるパリ。次回の旅行では何をテーマにしようかなと考えています。



自転車を輪状につなげたメリーゴーラウンド



『ミッドナイト・イン・パリ』の主人公がヘミングウェイと会ったポリドール

仏友俳句サロン 6

紫陽花やパリーに咲けば巴里の色 星野椿

吉田林檎（「知音」同人）

作者の星野椿（1930年—）は96歳の現役俳人で、星野立子の愛娘。立子が女性初の主宰を務めた俳誌『玉藻』の名誉主宰である。

昨年春このスペース（LA NOUVELLE No34）で下記の句を紹介した。

皆が見る私の和服パリ薄暑 星野立子

母も娘もパリで一句を授かったのである。ちなみに立子の父・高浜虚子もパリの句を残している。

この句は作者がパリに旅した際、滞在したホテルを出て右手の角に紫陽花が咲いていたのを目印にしていたという経験に基づいている。その紫陽花が日本では見られないほどの真っ青で、空の色とも交差して大変気に入ったのだそうだ。旅先ではなく帰国してから出来た句とのこと。鎌倉の自宅で見られる紫陽花とは全く違うものだったからこそその気づきだったようである。

十七文字のなかでパリがリフレインされているが、1回目は「パリー」で2回目は「巴里」。「パリー」はパリの明るさが際立つ表記だが、「巴里」となると和の要素が入って侘び寂びの心境が反映される。紫陽花の青の深さが思われる。逆転していたら表

記による効果は無意味になってしまう。

この句では「紫陽花」が夏の季語。花の色が変化することから「七変化」の別名もある。その色は水や土の影響を受けやすく、同じ花でも途中で色が変わったりする。パリの土壌や雨の水質が日本と全く同じではないことを考えると同じ色になるはずが



ないのは科学的にも証明できるが、旅先の気分や日本とは違う色彩・質感の建物、そしてもちろん空の色も作者の心の目に作用したことだろう。

作者の椿は「パリに行くと言句ができるんじゃないかしら」と語っている。実際筆者は俳句を始めて以来パリに行く時には一日 30 句を目指して作っているが、目標を下回ったことはない。残せる句になるかどうかは別問題だが…。皆さんも今度パリに行ったら 30 句とはいわずとも 3 句くらいチャレンジしてみてほしい。そしてそれを披露していただければ筆者としては至上の喜びである。

※表記は最新の自筆原稿に倣いました。

参考動画：ハイクロペディア「巴里の色」星野椿自選十句より 4K

<https://www.youtube.com/watch?v=vNq5hPiwCoY>

※吉田林檎は江森尚子（1994/平 6）の俳号です。

白水社 ク・セ・ジュ文庫発刊 エテム・エルデム著、鈴木光子訳、林佳世子監修 『オスマン帝国』について

鈴木光子（1961/昭 36）

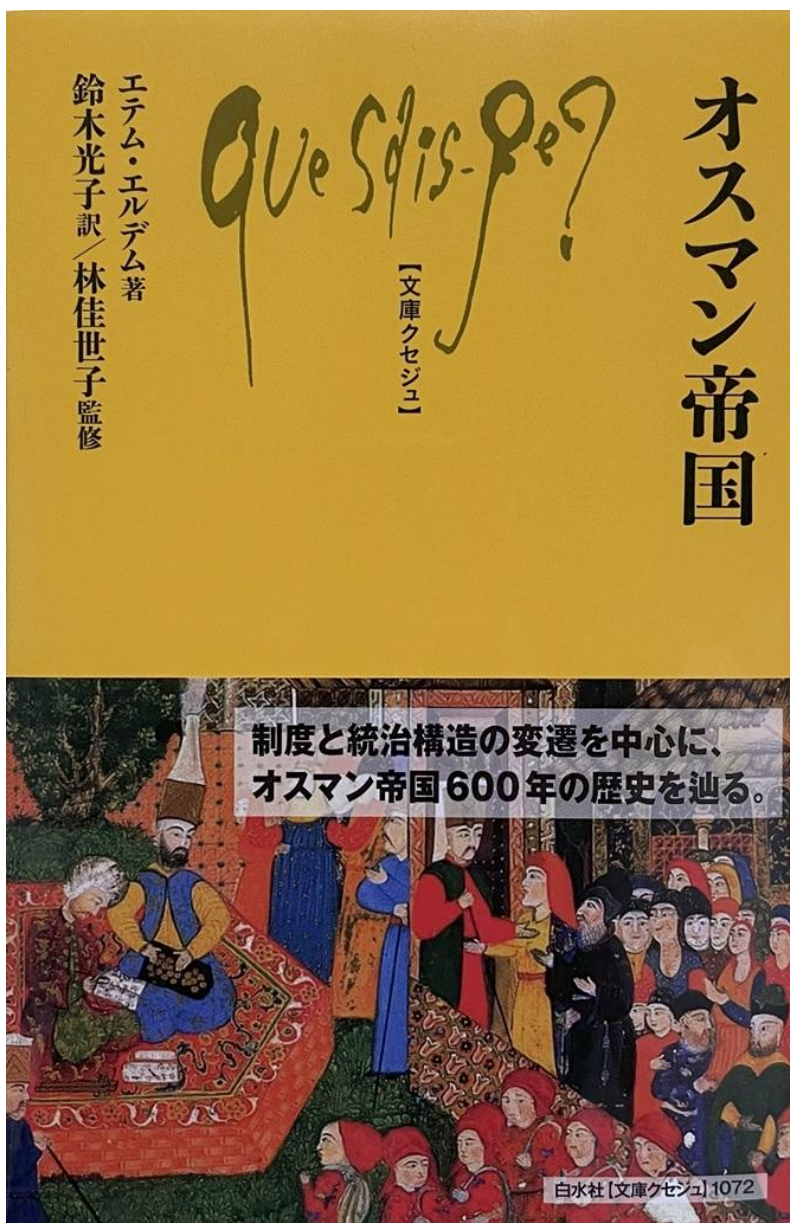
われわれフランス語専攻の者にとって、ク・セ・ジュ文庫の出版物は一種の聖典のような存在である。その白水社からの翻訳出版の話をご紹介くださったのは、母校東京外語の元学長、林佳世子氏であった。

発端は、先般の仏友会でもご紹介させて頂いた、私の 1 3 冊目の出版物であり、足掛け 3 年をかけて完成した通称『ゴルジェ日記』、正式タイトルは『駐日スイス公使が見

た第二次世界大戦』(582 ページ)を、母校外語の図書館に入れてもらうべく、テニス部の先輩である故上原尚剛氏を通して、当時の学長であった林氏にお届けする会見が終わった時の出来事であった。

「こんな、トルコに関するフランス語の翻訳のお話があるのですけれどね、いかがですか？」

数十年もの間、スイス一辺倒でやってきた私には、トルコは全く異質の存在だったが、その専門家である林学長がしっかりバックアップしてくださるとのお約束で、半分恐る恐る翻訳をお引き受けしたのがその経緯である。



何故トルコ人がフランス語で著述したのか？

著者のエテム・エルデムは、1960年生まれ、当時はジュネーブ大学で教鞭を取っていたようだが、プロヴァンス大学にて博士号を取得。母国ボアジチ大学やコレージュ・ド・フランスで教育研究に従事している。本人とも親しいという林学長のお話によると、トルコでは、フランス語の普及度は極めて高いそうである。

林学長は、本著の特徴を3つに分類され、その第2に、ヨーロッパの歴史とオスマン帝国の歴史を一体のものとして描いている点を挙げておられる。さらに中世から近世に向け

て動き出すとき、西ヨーロッパ諸国は徹底した異分子の排除により等質化が進んだが、オスマン社会は、多民族、多宗教、多文化の社会を中央権力が治める手法を洗練させていったと説く。

ク・セ・ジュ文庫として、フランスの読者を意識した面があるが、なにより「似てい

るが異なる」「異なるが似ている」西ヨーロッパとオスマン帝国の関係を忠実に記している、という表現が、オスマン史をよりわれわれに身近なものに感じさせてくれるだろう。

オスマントルコは、塩野七生氏の『コンスタンチノーブルの陥落』などに登場して、日本の読者を魅了しているが、本著はその下支えとなるオスマン帝国の構造を学術的に説明しており、帯には、『制度と統治構造の変遷を中心に、オスマン帝国 600 年の伝統を辿る』とあるように、一種の学術書となっている。

なお、ク・セ・ジュ文庫には、この他にオスマン帝国史として 1952 年刊行のロベール・マントランによる『トルコ史』、1985 年刊行のディミトリー・キツィキスによる『オスマン帝国』があり、本著は、同文庫では続く 3 冊目のトルコ紹介本となる。

アイルランドのバラード MV 制作秘話

…見えない糸に導かれて… 宮田翁助画伯との奇跡の出会い

小幡君枝 (1977 / S53)

わが いとしき フランス

2018 年、私は、外語大エンタメ会の皆様の応援を頂き、CD “Ma Douce France” をリリースさせて頂きました。そして今、その中の一曲「アイルランドのバラード」が、美しい山々の風景画像をバックに、MV (ミュージックビデオ) として YouTube 上に放映されています。「どうしてこうなったの？」という、仏友会の皆様からのご質問にお答えすべく、宮田先生との出会いと、私の先生への心からの感謝の気持ちをここに記させて頂きたいと思います。

CD リリースから暫く経ったある日の午後、私は懐かしい母の実家を望む、栃木の田舎道で、仲良しの従姉と他愛もないお喋りをしていました。そこに偶然通りかかったのが、従姉の友人でした。従姉は私を紹介し、「この人、最近 CD を出したのよ」と伝えると、彼女はどんな歌が入っているの？と聞きます。従姉が「あまり知られていないけど、アイルランドのバラードってすごくいい曲なのよ」と答えます。すると「私アイルランドの絵ばっかし描いている画家さん知ってる…」と答えたのでした。これがすべての始まりです。人生って不思議ですね。亡き母のお導きでしょうか？

その後、私は宮田先生にお目にかかり、先生に私の CD を聞いて頂きました。そして、何と有難いことに、先生は、ご自分の作品の画集や絵ハガキ等をお渡しくださり、どうぞ、ご自由に使って下さいと仰ってくださったのです。この時はまだ、私には MV という知識はありませんでした。おそらく先生も…。

つい先日、先生からお便りが届きました。お弟子さんたちと一緒に、MV をご覧下さったそうです。私の歌とのコラボを、生徒さんたちも大変喜んでいらしたとありました。

今回の MV 制作に関わって下さった全ての皆様に、心からの感謝を申し上げます。

※編集者注（山崎）

以下の YouTube リンクから、小幡君枝さんの歌をお聴きいただけます。

Ballade irlandaise 「アイルランドのバラード」

→ <https://www.youtube.com/watch?v=905IEohLNxg>

Valse d'été 夏のワルツ

→ <https://www.youtube.com/watch?v=aTLYM05SUbs>

第 30 回仏友会総会のお知らせ

仏友会総会は、コロナ以降は通常は 4 月に対面で開催しておりますが、本年は 3/15 に実施した水林章氏の講演会 & 懇親会に多数の会員各位が出席されましたので、時期の近い 4 月に再度対面で総会を開催するのは実務的にむずかしいとの結論にいたりしました。そこで、今年の仏友会総会は簡便にオンラインで開催することといたします。

1. 日時 **2026 年 4 月 20 日（月） 15:30～16:30**

2. 場所 **Zoom でのオンライン中継ですので、集合場所はありません。**

Zoom リンクは 4/10 頃に仏友会グループメールでお知らせします。

参加を希望される方は、その案内メールに対して「出席」のお返事をお願いいたします。

3. 内容 総会（会務報告、会計報告、監査報告ほか）

フランス語専攻の現況について（川口会長）

自由意見交換（今後の仏友会活動のアイデア検討）

4. 懇親会 4 月 20 日（月）の 18:30 から、本郷三丁目のイタリアン「ピアンタ」で仏友会幹事有志のミニ懇親会を行う予定です。対面の総会がなくて会員間の交流ができないのは寂しいという方は、こちらにご参加ください。費用は実費の割り勘となりますが、参加希望の方は 4 月 10 日（金）までに幹事の中村（soleilvinum@gmail.com）あてメールでご連絡ください。

【投稿のご案内】

デジタル版会報へのご投稿を歓迎します。文字数は 2000 字以内を目途に、テーマは自由です。次回の発行は 10/1（木）を予定しています。ご投稿希望の方は、9/15（火）までに幹事の中村宛てに Word 原稿をお送りください。添付写真がある場合は、1 記事あたり 2 枚まででお願いいたします。